銃後の生活体験

命瀬戸際のときのお茶の湯

槇島富代
練馬区豊玉中

昭和十九年頃でしょうか。

日本では戦局が次第に不利になり、頻繁に空襲警報が鳴りひびく頃のことで、私は堀越高等女学校（現在の堀越学園）に通っておりました。はじめは制服、ひだのスカートでしたのに、この頃はもんぺズボンと下駄ばきで通学しておりました。

昼間、B29が一機、必ず同じ曜日の同じ時刻に定期便のように都内に侵入して来ます。

丁度、お作法の時間でお茶を習っている時です。いきなり空襲警報のサイレンが鳴り出します。ソレッとばかりに今までおしとやかに取り扱っていたお茶碗をあわてて放り出し、後片づけもしないで荷物をまとめて一目散に家路に走りました。

昼のB29は偵察に来て、焼失地域の状況を調べ、焼け残ったところはどこかと写真にもとり、（恐らく）それを資料として、その日の夜半から未明にかけて、B29が一千機又は千五百機が来襲して、旧市内の空を真赤に染めて行きます。それを見てあの空の下に居る人達はどんな目にあっている事か、若し私があの中に居たらきっと死んでいるかも知れない。今日は人の身、明日は我が身、勝ち目のない戦争を一体いつまで続けるつもりかしらと、ひそかに思って心が暗く不安で落ち込んでいきます。

丁度その頃、こんな時だからこそ心を落ちつかせねばと思い、母はお茶を習いに行きました。

時々の日曜日の昼下り、下宿の学生さんをお誘いしてお茶を立てました。母と私はそれぞれ流儀が違います。が、そんな事には頓着しません。唯々、私達は連日の空襲と不安な戦局が気になって、精神的にかなりまいっておりましたので、一時の心の安らぎが欲しかったのです。日曜日のお茶は心のオアシスでした。

昔、武将が出陣を前にして日頃たしなんだお茶を立てたり、舞を舞ったり、笛を奏でたりしたことを本で知りましたが、その時の武将の心中が分かるような気がしました。

今でもお茶会に出たり、お道具を見た時に、戦争中お茶を立てて心の不安や乾きを癒した事をなつかしく思い出すと同時に、

戦争とは、どんな大義名分が立つとしても、絶対に起こしてはなりません。こんな残酷な行為はないと叫びとうございます。